

松 山 大 学 論 集  
第 21 卷 第 6 号 抜 刷  
2 0 1 0 年 3 月 発 行

福沢諭吉著「教育の目的」について  
—— 故清水茂良教授との交友を偲んで ——

倉 田 三 郎

## 研究ノート

# 福沢諭吉著「教育の目的」について

—— 故清水茂良教授との交友を偲んで ——

倉 田 三 郎

### はじめに

清水教授との出会いは昭和46年10月でした。清水教授の、神戸大学大学院経営学研究科のゼミ指導教授は簿記学講座の戸田義郎先生でした。私は会計学講座の山下勝治先生のゼミでしたが、戸田義郎先生には、学問だけではなく、個人的にも大変お世話になった先生でした。ちなみに、戸田義郎先生は、私の初めてのドイツ留学に際しては、ハイデルベルグ市内の多くの名所地や由緒ある店の名前を教えて下さったり、また、帰国に際しては大阪空港まで、わざわざ、迎えに来て下さったような優しい先生でした。その戸田義郎先生から、「今度、松山商科大学経営学部に清水茂良君が行くから、倉田君、先輩としてよろしく指導頼むよ」と言われて清水君に会った次第です。

会って話をしている内に、昭和20年3月25日生まれの清水君は北九州大学の商学部出身であることが分かりました。私も北九州大学の出身者ですが、商学部ではなく、外国学部の英米文学科の出身だと述べて、我々二人は共に同じ北九州大学の出身だということを知り、極めて仲良くなりました。また、彼と私は同じ一白水星の生まれであることも仲良くなった理由であります。彼はボーガンが趣味で、私は学生時代から剣道部に所属していたということもあって、学問一筋ではないということも、二人の共通点であったようでした。

研究室も一つ空けての隣同士であった為に、教授会が終わって帰宅途中など、しばしば二人で飲みに行ったものでした。清水君の赴任時の話は当時の松山商科大学の先生がほとんどご存じであったと思われるほど有名な話でした。それは、彼が神戸から直接に松山に赴任するのではなくて、神戸と松山の中間地域、つまり松山から見れば東の方向に一旦居を定めてそのあと、松山に赴任した、という話でした。それは大阪のある神社への信仰によるものだという話でした。それゆえ、彼はある意味においては信仰の念の強い青年だったと思います。

しかし、最近、会計学の本ではなく、論語の本を読んでいたら、中国には古くから「時令思想」という考え方があり、自然の運行と政治の進行との一致が「時令思想」のポイントだということを知りました。さては清水先生か、あるいは彼が信仰していた大阪の先生が、この「時令思想」を知っていたから、いきなり松山に赴任せずに、途中の土地に仮住まいをして松山に来たのかな、と感じている昨今であります。参考までに「時令表」とは、この研究ノート最後に示しますが、四角形で構成されており、その四角形の上部に、横に並んで、春、夏、秋、冬を升目ごとに置き、左側の縦には、一番目に・色、二番目に・方角、三番目に・物質、四番目に・政治を置いています。例えば、縦の列の二番目の「方角」を見ると、春は東、夏は南、秋は西、冬は北と書かれています。そういえば清水先生の赴任は、当然、春であり、松山から見れば東の方角から赴任したのは事実でした。今となっては清水先生に「時令思想」についてご存じだったかどうかを確認することの方法もないのが残念でなりません。

また、彼は、この一例からも察せられるように、宗教心の厚い青年でしかたから、宗教の話はしばしばしたものです。私も若いころから仏教青年会に入っていて、どちらかといえば親鸞が好きで、親鸞関係の本をよく読んでいましたので、その意味においても彼とはよく波長が合いました。二人で飲みに行った折、簿記学や会計学の虚しさをよく論じたものでした。

そういう付き合いをしていた関係上、彼の結婚式に際して、彼は私に仲人を

頼んできたのでした。彼の奥さんになる人は、旧制の松山高等商業学校（松山商科大学・現在の松山大学）の教授をされていた濱田喜代五郎氏の息女だと聞いて、私はびっくりした次第です。新郎の清水茂良氏は、将来、松山商科大学の教授になる人であり、新婦の浜田久子さんは旧制の元松山高等商業学校の教授（商法・憲法担当）のお嬢さんです。縁（えにし）の不思議さを感じたものでした。

浜田久子さんとお見合いをしたその夜、清水先生は我が家に遊びに来ました。そして清水先生は極めて熱心に、「久子さんは最高の女性だ。だから僕は久子さんと絶対に結婚する」と何度も何度も熱心に述べていたことが昨日のように思い起こされます。私も、当然、それは最高の組み合わせの縁だと思いました。かくして、昭和51年5月12日に、清水茂良助教授と浜田久子さんのご両人は華燭の式典を挙げ、私も喜んで仲人の大役を果たした次第であります。

会計学についてはどちらかと言えば逃げ腰の二人でしたが、それでも共著で「入門会計学」（平成12年 同文館）と「現代会計学入門」（平成20年 同文館）の二冊の本を書き、共著として出版したことは良い思い出になっています。しかし、今となっては反省しきりの昨今です。反省しきりの昨今だと言いながら、故清水茂良教授の追悼論文集に、あえて、山住正己編「福沢諭吉教育論集」の中から「教育の目的」について書くなんで、と批判を受けるかもしれませんが、彼と飲んだ折、よく「教育の目的」について論じたことを思い出したからです。それ故、この拙稿を、ここに研究ノートとして、故清水茂良教授の御霊に捧げたいと思います。

### 福沢諭吉の「教育の目的」

清水教授の追悼論文集なのに、あえて福沢諭吉著「教育の目的」を選んだ理由は、上に述べたように故清水教授と「教育の目的」についてよく論じていたということ以外に、もう一つには、故清水先生や私が、かつて松山大学で教えていた「簿記」（Bookkeeping Buchhaltung）という言葉を翻訳したのは福沢諭

吉ではないかと思われているからです。いや、確実に福沢諭吉の訳語だと言われていることから、私の個人的趣味からも福沢諭吉著の「教育の目的」を取り上げた次第です。なお、私の最近の個人的な興味から、福沢諭吉に関するいろいろな本を読んでいて、福沢諭吉は「偉大な先駆者だな」と尊敬の念を強めてきていることもこの拙稿を纏めるに至った動機になっています。ちなみに、戦後、電力再編成を主導した故松永安左エ門は、恩師の福沢諭吉を、聖徳太子、弘法大師と並べて、「日本開闢以来の三大偉人」と尊敬しています。福沢諭吉が松永安左エ門の恩師であるから当然であるとしても、福沢諭吉の思想は今日の景気低迷下の日本の状況下においては見直されるべきものがあると感じているからこそ、あえて取り上げてみた次第です。

きっと清水先生もあの世から笑いながら許して下さるものと思っています。さて、「簿記」という言葉が出現するまでは、福沢諭吉は「帳合の法」という言葉を使用していた形跡があります。実際に「帳合の法」という古典的文献があるのですから。

当時の明治政府は、海外からの学問の輸入に際しては、外来語の専門語を漢字の二字に纏めるようにとの指示を出したとのことです。そこで、例えば、西周（あまね）という森鷗外と同郷の鳥根県津和野町出身の学者は「哲学」という訳語を造り上げたとのことです。ディバートを「討論」と訳したのも福沢諭吉だと言われています。

福沢諭吉が「簿記」という言葉を訳出していなければ、我々のように大学で簿記・会計学を教える者は、今頃、「帳合の法学会」とか「大福帳学会」といった名前の学会に所属していたかもしれません。その意味においても福沢諭吉はわれわれ簿記学会の大恩人であるとして高く評価してもよいのではないのでしょうか。

明治時代の人は、訳語の名称一つにしてもわかりやすい言葉を案出したものであることを今更のように感嘆する昨今です。それに比して今の我々は専門用語の案出に努力していない憾みが致します。例えば、貸借対照表・損益計算書

に並ぶ第三の財務表に対して「キャッシュ・フロー計算書」なんて片仮名を当てはめるのは如何なものかと思っている昨今であります。「資金計算書」という名称の方が日本人の私には好ましく感じられるのですが。貸借対照表・損益計算書・資金計算書の財務諸表三表と書くと日本の会計制度の話だな、と思うのですがね。

ともあれ、「簿記」という用語をわれわれに与えてくれたことに感謝して、併せて、福沢諭吉が教育に対してどのような感想を持っていたかを知り、霊前の清水教授にお伝えするとともに、過去45年間教育道に生きてきた私の反省の糧としたいと思います。勿論、反省の糧は、大阪国際大学でのあと残り少ない教育道を生きる上での糧としたいと念じているからです。

### 福沢諭吉の「教育の目的」について

福沢諭吉は、その冒頭で、「教育の目的は、人生を發達して極度に導くにあり」と述べて、「そのこれを導くは何のためにするやと尋ねれば、人類をして至大の幸福を得せしめんがためなり」と喝破しています。ここで問題になるのは、「至大の幸福」とは何かということの議論に入るのではないのでしょうか。

この点について福沢諭吉は、「天下太平・家内安全」と結論づけ、この八文字の内二字をとって、「平安の主義」と名付けています。そして、平安に関連して、「教育の目的は平安にありというも、世界人類の社会に通用して妨げあることなかるべし」と言っています。この言葉は極めて意味深長です。そこで彼は徳川政府二百五十余年の例示や往古支那の天子の宮殿の例、あるいは蒸気船便の利用等の例を挙げながら、平安の意味を説いていくのであります。

そのような例についての「平安」を彼なりに説いた後、福沢諭吉は、「平安」、つまり、「天下泰平・家内安全」について次のような論述を展開していますので、その展開を次に紹介したいと思います。

「天下泰平・家内安全の快樂も、これを身に亨(う)くる人の心身發達して、その働を高尙の域にすすむるときは、古代の平安は今世の苦痛不快たることあ

るべし。余輩のいわゆる平安とは、精神も形体もともに高尚に達して、この高尚なる心身に応じて平安なるものを平安と名づくるなり」と断りながら、さらに、次のように論を進めています。「すなわちこの平安を目的とするところの教育の旨（むね）は、人生の働の一カ条をも空しゅうせずして快樂を得んとするにあり。足るを知るを勧むるにあらず、足らざるを知りてこれを足すの道を求むるにあるものなり」と。

この福沢諭吉の一文を故清水教授にお見せしたかったな、というのが今の私の心境であります。彼は趣味も豊かで、ボーガンなるものと遊びを共にしていましたが、ボーガンを趣味にしていたのは松山では彼だけでした。單車にも乗っていましたが、「危ないから止めなさい」と僕が、忠告すると、「風と共に遊ぶのは気持ちがいいよ」という答えで單車を止める気持ちはさらさら無かったようでした。私もゴルフを趣味にしていたので、遊びのことも二人の会話の主要なテーマになりました。

僕が福沢諭吉の言葉で驚いたのは、「足るを知るを勧むるにあらず、足らざるを知りてこれを足すの道を求むるにあるものなり」という言葉でした。この福沢諭吉の言葉を何度も私の頭の中で繰り返していた時、ふと慶應義塾大学の「義塾」の意味を思い出したのであります。広辞苑によれば、義塾の意味は「義捐金で公益のために設けた塾」とあります。なるほど「足すの道を求むるにあるものなり」という考え方が慶應義塾大学の創立に連なっていったのではあるまいか、と自分なりに理解したのでした。「福翁自伝」によれば、「教授もやはり人間の仕事だ。人間が人間の仕事をして金を取るに何の不都合がある」というわけで、「授業料という名を作って、生徒一人から毎月金2分ずつ取り立て」という1節が見られます。学生から授業料を取るシステムは慶應義塾大学が日本で初めてのようです。でも、福沢諭吉が学んだ大阪の「適塾」では入門に際して「束修」として、入門料のようなものが金銭で入門時に納められていたという話は聞いたことがありますし、また、当時の私塾では、盆暮などに生徒が「授業料」として先生に、金品に熨斗つけて恭しく差し上げるのが習わし

だったとのこと聞いたことがありますから、日本ではじめてというわけではないようです。

慶応義塾大学の先生や卒業生に、創立の主旨を聞いてみたいところではありますが、多分「足るを知る」といった福沢諭吉の論述についての私の理解からそれほど乖離したものではないと思っています。

私の理解が正しいとすれば、「慶応大学」と呼ぶべきではなくて、「慶応義塾大学」と正しく呼ぶべきでありましょう。「慶應義塾大学」という呼び方こそ福沢諭吉の「教育の目的」に賛意と敬意を込めての呼び方であると私は思っています。

しかし、それにしても福沢諭吉の時代には、福沢諭吉も、おそらく老子の第33章「足るを知る者は富む、強を行う者は志有り」（知足者富 強行者志有り）、つまり何事においても、足るを知る者は常に豊かであり、志有る者は強行するという考え方で、教育を受けたのではないのでしょうか。私自身50年前以上の学生時代から、「足るを知る者は身は貧すれども心富む、富貪（むさぼ）るものは身豊かなれども心賤し」といった考え方で人生の大半を過ごしてきただけに福沢諭吉のこの言葉には驚愕した次第です。

例えば、京都の龍安寺に置かれている蹲踞（つくばい）には「吾唯足知」と書かれています。この文字の解釈についてはいろいろな説がありますが、私は学生時代から、素直に「われ、ただ足るを知る」と理解し、その言葉にひき続き上述のように、私は、「富を貪（むさぼ）るものは身豊かなれども心賤し」という言葉を付加して、私の50年来の座右銘にさせていただきに、福沢諭吉の「足るを知るを勧むるにあらず」という言葉には驚いた次第であります。清水先生も「足るを知る」という言葉が好きでした。従って、教員組合の給料やボーナスのアップ運動には清水先生も私もあまり積極的では無かったように今思い出します。

しかし、福沢諭吉も富を貪る考え方については大いに批判を展開していますので、この批判的な意見を次に見てみましょう。彼曰く、「大は各国の交際に



権を争い、小は人々（にんにん）の渡世に利を貪り、はなはだしきは物を盗み人を殺すものあり」との言葉は、私が長年考え、言い続けてきた「富貪る者心賤し」に相応するものであらうと思われるのです。しかし、ここで、私なりの問題が生じたのであります。それは、富貪る者と言えども、初めに引用した「平安」を求めているのではないか、ということであります。そこで、福沢諭吉は言います。「ゆえに平安の主義は、法外の仲間にも行われて、有力なるものといわざるをえざるなり」と。

また、ある個所で「平安を好むの人情は、世界中に通用してたがうことなく、各国の交際も人人（にんにん）の渡世も、その目的、平安にあらざるはなし」と述べて、更に、「人生の目的は、他を害して身を利するにすぎず。これをもって教育の本旨とするは当らざるに似たれども、人生の発達のに眼（まなこ）を着（ちゃく）すれば、この疑いを解くに足るべし」と言うのです。極めて難解な表現ですが、「いわゆる手もて口に接する小児の如き、これなり。野蛮未開、耕して食らい井を掘りて飲むがごとき、これなり」と言われると、「なるほど」と理解できるのであります。

このような論述を具体例を交えながら展開した後、私が注目した論述は次のような一節です。長い論述ですが、極めて有益であり、また、福沢諭吉の教育論を知る上で大切だと思われまますので、次に労を惜しまずに引用したいと思います。

「ここにおいてか貧困を救助し、文盲を教育する者あり。これを仁人君子と称す。仁人君子は、我が利害を棄てて人のためにし、我に損して他に益すというといえども、その実は決して然らず。その棄（すつ）るところのものは、形体に属する財物か、または財にひとしき時間、心労にして、その報いとして得るものには、我が情を慰むるの愉快あり。すなわち形体の安楽を売って精神の愉快を買うものなり。人生の発達、そのまったきを得て、形体の安楽にかねて精神の愉快を重んずるの日にいたり、はじめて人類至大の幸福を見るべきなり」と。

ここで、私は形体を肉体と理解すると、教育の目的は、「教育の対象者をして肉体的健康と精神的健康とが一致して満足な状況に導くことにある」、と福沢諭吉は考えているものと理解するのであります。

かくして、彼は、「形体の安楽を知りて精神の愉快を知らざる者は、とくに盗賊以下に限らず、現今世界各国の交際においてもまた然り」と述べています。たしかに、現代でも世界の状況を見回してみると、精神の愉快を知らない国々や民族が多数いることを毎日のごとく新聞紙上で報告されていることによって納得していることも事実であります。

その意味においては、日本の国も、また日本の多くの人々も、福沢諭吉が述べていますように、形体も精神も、ある程度の数において愉快的状況にあるのではないのでしょうか。たしかに企業倒産の数の多さやそれに起因する失業者の増大、あるいは毎日の新聞紙上に報道される夥しい犯罪事件と言った部分的な不満足な状況があることも事実です。しかし、北朝鮮・イラン・イラク・アフガニスタン等の人々の生活を新聞やテレビのニュース等で見るとき、私は、日本人民はかなりの数において「愉快的状況」下にあるのではないかと考えています。

それにしても「足るを知る」ことこそが人生において一番大事なことではないかと痛感している昨今であります。例えば、「菜根譚」にも、「足るを知る」と同様な概念をもつ「敲器（きき）は満（み）つるを以って覆（くつがえ）る」という言葉があります。つまり、満ち足りた状態、よすぎる状態を戒めた言葉です。これは別名「宥座の器」とも呼ばれ、荀子の「宥座篇」にも見られる話です。

故清水教授も、むかし30年前くらい、私と飲みに出かけた折、よく「足るを知る」ことが人生で大事なことだと述べていたことを思い出したので、福沢諭吉の「教育の目的」と表題を掲げて、故清水茂良教授への思い出を綴った次第であります。私も何年か先には、「清水先生、あなたの棲んでいらっしゃる彼岸のかなたに行きますので、その節には先輩として初任者の私を宜しくご指

導・ご厚誼を賜りますようお願い申し上げます」と述べて、この拙稿の結びとします。

参考までに

時令表

	春	夏	秋	冬
色	青	赤	白	黒
方角	東	南	西	北
物質	木	火	金	水
政治	慶	賞	罰	刑

引用文献

- |                       |      |
|-----------------------|------|
| 岡本光生著 「論語」の知恵でキリツと生きる | 中経文庫 |
| 山住正巳編 福沢諭吉教育論集        | 岩波書店 |
| 守屋 洋著 中国古典「一日一話」      | 三笠書房 |